今に想う

過日の新聞には某大学生が隣家のＴＶ音量が大きいとか、子供の声がうるさいという理由から五人を刺し殺したというショッキングな報道が新聞に記載されていました。中でも四才の幼子に対して、十数箇所の刺し傷があったという記事には寒気すら感じさせられたことです。

翌日の新聞には、学校ではごく一般的な真面目な学生であったとも報じられていました。表面的にはごく普通の青年が、何故想像を絶するような凶悪な犯行に及んだのか、犯行動機、背景、誘引等は、時と共に解明されるでしょうけど、一つだけ言える事は『彼はあまりにも孤独でありすぎた』という事でしょうか。その孤独性は生来のものではなく、下宿生活の中で自己形成されたきらいがあります。全てのものに「自分」が尺度でありすぎた。その結果として、自分には甘く、他人には厳しくなり、加乗的に被害妄想感情が崇まったのではないでしょうか。

犯罪社会学の岩井教授は『東京のような過密都市では誰にでも十分起こり得る土壌がある』と分析指摘されています。

この出来事は私と無関係のようではありますが、実は他人ごとではないのです。

この機会に「オカゲサマ」「アリガトウ」の言葉の暖かみをしっかりと味わいたいものです

（寺報第四号）